

はじめに——『大和物語』の再評価を求めて——

山下太郎

書かれた作品としての『大和物語』の題号がもつともはやく現出する書物は、平安時代後期の『袋草紙』⁽¹⁾であろう。『袋草紙』は、百五十〜百五十三段など、『大和物語』のいくつかの章段をとりあげて、歌に関わる伝承の事実を伝えるものとしている。

また、「伊勢物語 和歌二百五十首」の項につづけて「大和物語 和歌二百七十首」の項をたてる。示された『大和物語』の歌数は現行本の二百九十四首より少なく、『伊勢物語』ほどではないものの『大和物語』もまた、増補改訂などの流動の過程にあったことを窺わせる。

藤岡作太郎『国文学全史 平安朝篇（一九〇五年初刊）』は、『大和物語』に触れて『千五百番歌合』の顕昭の判詞で「源氏、世継、伊勢物語、大和物語とて歌謡の見るべき歌」⁽²⁾とされたことを紹介するが、高い評価をあたえることはない。「片々たる事実を輯めたるもの」「文学的価値甚だ多からず」「伊勢物語の体を学びて（中略）なお彼に及ばず」「伊勢は奇抜に、大和は平凡なり」「（全体を概括し

て論ずるは) 容易のことにあらず」などとするのである。⁽³⁾

事実を伝えること、歌に重点を置く「歌物語」であること、しかし、『伊勢物語』に劣ること、などは現在の一般的な認識も大差はないのではないか。『大和物語』とは何か、が必ずしも明確になっ
ていないこともその一因であろう。果たして「歌物語」という括りで『伊勢物語』と同一次元で扱う
ことは適切なものか。再検討の時期に来ている。

『伊勢物語』の語りは和歌に収束していく「歌のための語り」である。対して、『大和物語』の語り
は必ずしも決着を「歌」にゆだねない。「地の文」の語りによる叙述と描写に、『伊勢物語』に比して
より多く注力する。「和歌」を散文の機能に包摂し、相対化しているのである。いいかえれば、「和
歌」が「語りのための歌」になっている。『大和物語』は、「歌物語」から散文叙述によって形成され
た物語の方へ、『伊勢物語』とは別の一步を踏み出したものとなっている。

「歌物語」という括りで同一範疇にあるものとして扱うのであれば、和歌に収束していく散文叙述
の凝縮度、あるいは、文学作品としての質の高さにおいて、『大和物語』は『伊勢物語』に及ばない
かもしれない。しかし、こうした評価は一面的ではない。『伊勢物語』の質の高さはそれとして、
『大和物語』には『伊勢物語』とは異なる作品の質の在り方、素晴らしさ、いわば『大和物語』とし
ての達成があるのではないか。

『大和物語』は歌に依存しない散文のありようを模索し実現したのである。文学史散文史の射程を
遠く延ばし、『源氏物語』の散文までも視野に入れるならば、『大和物語』における散文叙述の方法論
的達成は是非とも再評価されなくてはならない。和歌に依存しない、散文としての叙述の力、例えば、
「内話文」の多用によって描写の方法を腐心し模索する点、和歌と散文もしくは散文相互の言語遊戯
的な関連など、その散文叙述の様相いわば散文叙述性を再吟味することで、『大和物語』という作品
の持つ光芒および文学史的な車轍が明瞭になるのではないか。

『伊勢物語』と『大和物語』との間には大きな跳躍がある。本書は、それを実現した『大和物語』
の達成を見極め、その再評価を希求する試みである。

注

- (1) 藤岡忠美校注『新日本古典文学大系・袋草紙』(一九九五年十月岩波書店刊)。
- (2) 『千五百番歌合』の本文は、古典ライブラリーWeb版『国歌大観』による。
- (3) 藤岡作太郎・秋山虔他校注『国文学全史平安朝篇1(東洋文庫198)』(一九七一年十一月平凡社刊)。